



▲渾身のガッツポーズの井口。300での優勝は逃したが、圧巻のパフォーマンスを披露した

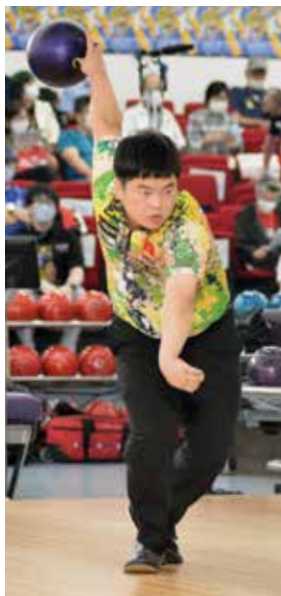
今年のデビュー組には、現役を含むナショナルチーム経験者が多数いるとあって前評判は高かったが、実際に現役のナショナルチームメンバーでもある井口遼太がトップシード、2位通過が羽ヶ崎匠海、3位通過が大

久保雄矢と、TV決勝進出の上位3名を60期が占め、残る一枠に、今年が最終年となる57期の原田岳が入った。

4位決定戦は、「練習ボールでもずっとラインを見つけられずに悩んでいた」という原田が、



▲「井口くんにあれだけ打たれたら、気持ちのいい敗戦です」と潔かった大久保だが、60期のトップ合格の実力は証明した



▲「同期に負けるのってこんなに悔しいんだと思知らされた」と羽ヶ崎

井口遼太 満点デビュー

ドリスタカップ2022プロボウリング男子新人戦が、57期から60期の35名によって争われた。ナショナルチームにも籍を置く井口遼太(60期・笹塚ボウル)は、ライセンス交付から3日後に行われた『シーズントライアル2022スプリングシリーズ』で早速優勝を飾ったが、この新人戦も1年目で制して百点満点のプロデビューとなった。(主催：(公社)日本プロボウリング協会 特別協賛：ドリームスタジアム太田)



▲今年の新人戦は、女子の今井双葉とともに現役ナショナルチームメンバーの2人が実力を証明

から6連発の大久保が268で快勝、井口が待つ優勝決定戦に勝ち上がった。

1フレから豪快なストライクラッシュをかける井口に対し、ここまで快調に勝ち上がってきた大久保は、「右レーンが遅くなってきていた」と、2フレは①③⑦を残すと、カバーならずオープン。その後も2つのスプ

リットなどで182に終わった。井口は8フレのブルックリンのストライクなど、運も味方に11連発。中継(スカイA)の解説席に座る父親(井口直之・41期)の目の前で、300で優勝に花を添えるかと思われたが、最後の1投は⑩タップで299。しかし鮮烈のデビューでその存在をアピールした。

優勝・井口遼太のコメント

シーズントライアル(スプリングシリーズ)の優勝は、自分のやっていることが間違いではない、自信を持つと思えた。それが今回の結果にも少なからずつながっているかなと思う。ただトライアルも新人戦も、自分の好きなコンディションで、うまくはまってくれた部分もある。

優勝決定戦最後の投球は、しっかり投げたけど、日ごろの行いが悪かったんですね。入射角度がなくなってきていたので、ストライクにな



▲父親と記念の2ショット

る確率は半々ぐらいと思っていた。300で優勝はできずと思うので、ある意味よかったかな。優勝はもちろん意識して臨んだけど、新人戦のあとレギュラートーナメントが続くので、ここで勢いをつけて…という気持ちが強かった。優勝ボール：MOTIV(ABS) ジャッカル・ゴースト

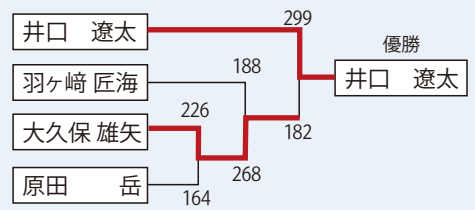


▲「ラッキーもあってテレビ決勝までいけたのもう少しなんとかしたかった」と原田

●優勝決定戦

大久保 雄矢									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
19	28	58	86	106	126	145	154	173	182
井口 遼太									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
30	60	90	120	150	180	210	240	270	299

●決勝ステップラダー



第21回アジアジュニア選手権

8月14~19日
タイ・バンコク

石田万音選手がマスターズ戦で銀メダル



▲マスターズ戦で銀メダルの石田選手。やや苦戦した日本チームにあって、エースとして気を吐いた (写真提供：タイボウリング連盟)

新型コロナウイルスの影響で、ナショナルチームは丸2年間国際大会に派遣できていなかったが、8月14日から19日まで、タイ・バンコクで行われた第21回アジアジュニアボウリング選手権大会(旧アジアスクール選手権)が、久々の国際大会への参加となった。

日本からは、男子は菅原奏(盛岡市立高)、砂長空(桐生第一高)、熊凌汰(福岡県立香椎高)、座波正斗(沖縄県立首里東高)の4名、女子は近藤

眞桜(太田市立太田高)、濱崎りりあ(神奈川県立綾瀬西高)、戸塚知菜(愛知県立木曾川高)、石田万音(神戸野田高)の4名が参戦した。

女子は4人チーム戦で今大会初のメダルとなる銀メダルを獲得。さらに最終種目のマスターズ戦では、石田選手が3位で決勝ステップラダーに進出。3位決定戦を194:183で勝ち進むと、優勝決定戦はシンガポールのLim Shi En選手に375:395で競り負けたが、2つめの銀メ

ダルを獲得した。男子は、17日朝に行われた新型コロナウイルス抗原検査で2名が陽性と判定された

ため、4人チーム戦以降の欠場を余儀なくされ、改めてこの時期の国際大会参加の難しさを感じさせられた。



▲日本選手団。久々の国際大会も、コロナを警戒しながらの参戦だった